

特42

946

伊達

顯秘錄

七

八

娯覽喃誌

第十四號

伊達

娘節用

八

兒雷也

(定價金三錢五厘)

本誌壹冊定價三錢五厘
 十冊前金三十一錢五厘
 一ヶ月前金七十錢
 前金領收ノ分ハ發兌毎
 ニ配達可致候但シ市外
 ハ別ニ郵税申受候且前
 金相切候共御買止メノ
 御沙汰無之候得ハ引續
 配達可致候也

明治十六年七月十日
 六月御届
 同十七年
 二月三十日
 日成刊

校訂者 長野縣士族 福田銀太郎
 同縣下東筑摩郡北深志町 四百五十三番地
 出版所 吟天社
 同上新甲五十六番地
 松本本町二丁目
 高美甚左衛門

鳴盟會設立廣告

詩歌文章ノ學ハサル可ラサル復言フヲ要セス只憾ム僻遠ノ地良師友
 ニ乏クシテ切磋ヲ得サルヲ依テ今般在京ノ諸家ト計リ鳴盟會ナル
 者ヲ設ケテ大ニ斯道ヲ琢磨シ旁ヲ其評撰添削ノ依頼ニ應ス
 添削料左ノ如ク定ム
 一五七絶一首一錢同律二錢古詩一篇三錢漢文四百字以下五錢以上十錢眞假文一行廿五
 字十行ニ付四錢歐文三ペーシ以下十錢和歌一首五厘俳句都々逸共五厘
 一草稿ハ十日毎ニ返戻スル者トス但返稿料トシテ別ニ金二錢ヲ要ス
 一添削料ハ郵便切手ニテ送ラルモ妨ケナシ
 一傳記序跋碑誌等ノ撰文并揮毫等囑托ニ應シ諸名家ニ紹介ス可シ
 一詩歌俳句等ノ撰評ハ詩百首ニ付三十錢歌十五錢俳句都々逸ハ十錢
 信州松本北深志町一番丁新甲五十六番地吟天社内

明治十六年十二月

鳴盟會

東國館

本後へハ銀比細うち計を挿て粹を作とれ厭氣あし金五郎ハ手枕しく巨
 鍵に當り眠入一様子小三ハ戸棚より寝衣出し密と懸く枕と當ぐハ其邊片付金五郎
 の初織を疊ハ戸棚へ仕舞火鉢の傍を坐り煙草を一服呑み傍ある淨瑠璃本を手よ
 取上げ讀みながら乳母と話し 小三「コッ乳やよ此様事と云ふら又つまたらぬ事と笑ふ
 いららぐれ水は流きと人ハ行末程定めあいな者となしよ此淨る本ハ三勝と見る様あ
 れば身は上様似て居るが若し萬一浮世の義理は纏えらる如何様別色にあふふも知れ
 マア爾もつたふ可奈何と外に苦勞は無けと夫はッかりが案じらる人ハ知らぬ胸
 を痛めるよト身は行するをくりのへしほろととひと乳「アレ又してもくそんな益
 をも立ぬ事と被仰る者でござりません其三勝は身は上は夫と誠は誠作もの今時縁
 切だの何れ彼と芝居ハ人情本では有まぬし胡爲して其様事有まら者かたわいも
 さい事はッかりト「いひまぎらせと共みだ「ほんよ爾ハへば爾も者作物とは知つ
 も身は比ささく線言ハふも矢張女は淺しか故金坊と云子迄ある者を御本妻には爲さ

世とも末に末まで添添やうと思ひあいで何とせう若もれ事が有らば夫と又其時れ
 事もうく案じまひくつひのひれ人が死たるにぞ小三「夫なら乳やア往て来ら
 氣を注ぐお呉よト出ろハ母んにア坊が歸ッて私居ありつゝ又ね父さんを賣る
 ぶらうらアノはいちやうふうづ焼が有か彼と遣て慰してね呉色私又歸りよ
 何ぞれ土産を買來ら而く若旦那が眼が覺たら大方茶漬を上らうか鍋焼で
 も取て上てね呉よト女房かたさぞわらはるる斯まで良人や我子をば大事に懸る心
 う座敷を出くも兎に角に内の事のみ案じらるれと勤と云字は是非なくも厭客よ
 も機嫌どる心け中を愛かめ斯て小三金五郎と唯金之助に愛に溺他事なく暮す
 其年も暮て又来る春霞驟しく空も麗る彌生中旬の事あるが金五郎之仲間れ者も誘ひ
 きて向ヶ岡に花見もどとの微醉も皆舟又打乗く青柳橋まで来りしが此よ上陸く
 金五郎は人よ別きて可助と云供れ男を引連て糸川に前へ来せば乳母は金之助と抱
 きけ、斯と見より遠方から乳「チャ」く坊さんアレね父さん入ッまやいまし



よ 金五郎「サ、坊か乳母に抱こして善れふね母アの内にも乳ハハいね宿でござり
ますサア坊さんお父さんにお辭儀はるへい御機嫌よ路とチホ、否々ね父さん
抱まの爲ません最眞暗にお望升から寝緒がよふござり升 金坊やお父さんは
お母さんね所へ行くね乳を呑よ暇々よト 顔をみて「ね父ちゃん否々お母ち
やんね乳のや〜」乳「サ、左様〜ね母さんねお乳の坊さんねお父さんねではど
ござりません糸へお父さんは御機嫌もゑね懊惱さすツ〜いけません 金五郎「ハ、ハ、ハ、
坊やね馬鹿や〜」ト くらうひあがら内へ今座敷より歸りまま〜三味線筥に凭懸り物
思はしげある顔容よ 金五郎はそ 小三どうぞ仕たれり變な顔をまゝ居れふト 心に
わらひ「否へ如何も致しません今座敷より歸りまし〜サ而て貴郎は何處にお歸
でござり升へ 金「ナニ巳の拙者めは今日朋友れ者れ交際よく無據さく向ふ島へ御遊
覽と出懸て鯛七へ押うけた處が女子が大勢出てソレお手を執き足を執と滅多無性
よそやしたく夫うら何でも大酒盛献は酬るつ唄へや弾や 歌「懊々迷ふて迷てぢき〜

口説も痴話も屏風の外はふり出たる一夜着「とやし」サツサおせ〜堀迄着る候は
野とあれ山とあき床取さら寐て歸れ雨降さら居續ぐ〜と唄ふから堪らぬて 小三「
道理こそマア酷い御機嫌それ然と貴郎と京をね立れ時ね父さんね被仰た事と覺
てれ出遊ばま升へ 金「是は又改まつたね尋問親父の教訓を守ればよそ他れ女に目
も觸せ只た一人を守つて居から何もはやれ案トさる事はござさく候サ 小三「オホ
、其思召さく嬉ひけを今でと日陰れ此身もゑね祖父さんや曾さんか此様か事
どと御存じさく只郎君が我儘で放蕩と遊ばせ事と思召でござりませうのらね宿の
首尾がれ大事故餘り御酒を上りまると郎君ねお爲に爲ますまい〜と其苦勞で
まませんと おもひあまる心に悪しと思は糸と一杯機嫌は金五郎「ア、百も承知二
百も合點ね爲のしれ其意見聞たくも糸へ耳が汚る酒と餘り上り升と郎君ね利
よありませぬッ、ヘン酒を呑ふか呑先へが巳が口ごのら勝手だに大死なれ世話
お茶でも上きッ其機理屈らしい異見を云れと大方他も變妙な愉快な話でも有うらだ

らう 小三「チャ久しい者で有ますよ 金ナニ久しぬ昵があるど夫ぐうら何れ彼と云
 て早く歸さうと思ふれだあ良くそんあ邪魔不成さ歸ッて遣う留るあト ちさるの
 とみふ死へ死せるとんくハッあたり小三はい「お腹が立なら如何でもあさみ偶々
 ぼも仕事とねも急ばわざとそしらぬうほをしとく
 にお早くお歸りなさるも御孝行でござりませうチャ何だう風が變ッ様だア雨が
 降糸バ可ダト逆らはぬ故金五郎とひさちゆがり「ナニ御孝行でござりませうお香く
 でね茶漬が聞て呆らア雨の降ふが降め急が飯るよ四も五も入る者かト ひびなくせば
 我儘氣儘と言散し快の、家を歸けり乳母は此時金之助を連れて歸り掛れと金五郎が不
 機嫌もゑよ次の間おて遊ばせて居たりしが漸く此方を出來と 乳ニ御新造様を今日は
 れ父様の御機嫌がね悪うござりませしたねへ何れお腹立で如彼にお怒りあそッふれで
 ござい升をト ぬるバ小三と「何サ何時でも如彼だナ御酒と上ると何だの彼だれと
 私は無理計り被仰のサ偶又は早くて歸しやさないと郎君も種々事情あるお身ゆゑね
 宿は御首尾が大事ぐうらサお家でと心配もなさるぐうらし私よと我儘れ言所だどね

方へ中送り新法の枱を作らせ安藝が腰焼印を捺せ中觸させけるは近來御物入多く御
 勝手向不如意に上御家督御物入打續江戶御屋敷困窮は付浦屋の安藝殿御計ひよく
 以來納方と新枱を用ひ拂ひ方と古法はまそを用ひ且是迄は年貢諸役の未進もせ残
 ず納めさせ若出すべき力あき者と妻子を押へ家中へ奉公させ其給金と役所へ取
 勘定と立る故未進奉公と云ひ米を殿へ納るふと新法は太まそと用ひ家中へは扶切
 米百姓方へは渡し物は皆古まそと遣は一枱は内よく眼前二舛宛れ損あて杯流言ひを
 へ何れ思慮もあは小役人共の目付共れ中處を實と聞込懸慮ある名主百姓等と違てと
 近頃の仰付られ我々も其意得さきと権威強は安藝殿の指圖あきば誰り點を打てた
 是非もあき次第あり我々と然せる難儀もなは夕村の困難氣の毒千萬あると辨しし
 ける程お百姓共聞傳へ何様安藝様は云れざる下知あて前々ハ左様の情あき人とは聞
 及ばざりしが老選せられし者あるかど嘲り憎む事大方あき其上大支配は名主成と
 小名主共を撰み出し内用あり迎役所を招き四人は目付共列座にて密に中聞せけると

近頃新法のまゝと定め并ふ未進奉公は事悉皆百姓等の難儀に決して殿様は御爲に
は成せ此之伊達安藝一人は私慾にて既江戶表後見衆の間に達し殊の外不可思議に
思召さるるをも申さば大切は詮議下よと訴へ出さる内は鹿忽に仰出さるる筈あり安
藝殿の殿様の名代とも勤先なる身なきは誰り異議を云者ゆらん是非もなく我々其
下知は隠ひ居れど夫に付惣百姓申合せ密に江戶へ登りて御屋敷に門前へ詰懸け其中
頭立者四五人安藝の私慾押領を訴ふるに於ては早速御吟味ありて安藝は隠居仰付ら
れんは治定なり然る上は御仁徳は御仕置は以前に通とお成り村々に安堵諸役人れ爲
よもよし此儀面々同心なきは早速相談せよ但し我々斯様は内意せし事一切沙汰し
お只面々は存付たる様も申聞せよ彌々訴へ出るお極らば人数は一人も多きよし
村々に違判も入らず只御領分惣百姓中と申出すべしと委細に悪智恵を焚付けば名主
共悉く御内意有難く存し奉り候早速相談仕向らんと悦で退出し夫より小前の百姓
共を集先目付の内意と己が物にしく申聞せけるに惣百姓大さに悦び是は一段は思召

立此儘餓死せんより手足は働く内御供仕つらん妻子共迄引連行く御上屋敷の往還の
塞る程よせばよもやれ取上なき事の有間敷と騒ぎ立て彌々事を決せんと名主並に村
々まで分別者と云る、老人杯を集め評議しけるに狼河原に十郎右衛門と云る老人進
出て座中を静め各々おの益な死事と企謀る者のな近頃御沙汰些と御無体は様にも
も存せらるる、少談にも申泣子と地頭お勝れ未進奉公も出さるべき物を出さぬら妻
子を質お取さる事よ是非に及ばざる儀を何にもせよ左様の事安藝殿の指圖と思
はきたる各々了簡が此端よと呑込ぬ彼安藝殿の仙臺棟梁は臣にして生得慈悲深
く二萬石は知行取など夫程の人々殿は御領は百姓お何れ意趣あてて新柄に焼印まで
添て世話やかる、事有ん資を集先慾に耽る心あるば我先領分を絞取り其上殿は御領
分へ手と付ふる、筈も是等が先以て不審の第一あり今度皆思ひ立し故若や
と此間態々浦屋へ人を遣し動靜と聞合せしお御代替は付別して安藝殿御身と慎まる
る由借お申越た然れば此十郎右衛門は子供親類を意見して一人も江戶へ之訴へに出

申聞敷と思ふあり願くは各々此訴をは無用とせよと斯る事は天道が捨置きと屹度
善悪と糾するは知た事なり夫途待遠く思ひ是非共訴へんとあふば路用費しよ江戸
登して殿様と遊御外間をうせんよりは浦屋を詰て安藝殿と歎死訴へ其首尾は依て
江戸も公儀へも出らるよ近頃迂遠き思慮とる人々やと憚もさく云けよば名主白
姓共も理も服し漸く目付共は巧みらんと悟り何様能氣付所あり面々宿と歸と篤と
思案して又こそ相談せめと云けよバ十郎右衛門大と悦び重て申けると相談もさく斯
様は事を云觸したる人を吟味して以來其人に御油断あるお益か死訴へをあして忠臣
深死安藝殿に流付ん事恐るべしと申けよバ名主共彌々合點して重て言葉を出す者も
ありとけり

松前鉄之助武勇は事 荒木和助は捕は拷問は事

然程に田村隠岐守宗良の寂々思案して我台命を蒙り龜千代後見と成しが相役兵部少
輔は心底心得難き事れとあり我是を制せんとするも老若れ違ひ伯父甥れ好前有て心

に任せせ所詮塾居しと事を窺ひんに之如くと病氣と稱し引籠らさけるに兵部之獨り
悦び豫く仙台表は儀様々調署すれども事調は此上と又龜千代を窺ふばやと思案と
極先荒木和助の神文を以て密議を頼とけよば和助異議及ばば謀計と請て退死ける
茲に寛文十年七月廿日は夜龜千代が寢所の椽下は忍び窺ふ曲者ゆり松前鉄之助と斯
様は變を防がんと爲寒氣肌を裂が如き暑氣五体を蒸が如死も厭はぬ風雨は夜の一入
心と付て一夜も怠る事なく宿直せしが此夜此体を見く咄嗟と思ひ息を詰り居ると知
る彼曲者の幼君の寐物語仕給ふ御聲と耳を澄して聞居しが氷に如死短刀を抜放し既
に突出さんとする所を重光物をも云を腕先延し短刀を持する手首を無圖と取に曲
者之大に驚き覺えを震出し振放さんとす共松前が無双の大力にて掴み去事なれば
詮方盡く小聲もあり汝何者あれば我大望の妨碍を爲すやと言々るよ松前阿羅くと
打笑ひ然云汝の何奴あるぞ我と斯窮屈れ所屈居く主君れ危急を救ひ奉らんとす
る忠臣なと覺悟せよと言様引寄て捨伏んとするに曲者も金剛力を出し振放さんと争

そひける元來低尻床に下さる互に背を縮めて上と下へと捻合ける上には淺岡此物
 音に驚死近習れ者共より付強を引退け椽板とこぢ放するよ鉄之助と曲者と組伏せ繩
 を以て縛上げ淺岡殿夫と渡らせらるゝのと言ながら曲者と引出して火と指寄顔を見
 きば荒木和助をけり返すくも危き事共なきと幼君は御運強く且重光が比類か死
 勇猛忠義感老るゝ猶餘りあり斯て方々へ使を出し告知せければ兵部の大よ驚き力を
 落し此上遅參せバ彌々身は難儀あらんと神並三左衛門と召具し飛が如くに馳來るに
 續て原田甲斐其外は諸士追々よ走來り田村隱岐守も元來虛病は事なきば早速も伺
 候せよさける淺岡人々よ委細に物語をきそよ皆々憫きて詞なし時に兵部少しも騒が
 ぬ氣色よて此者之先君綱宗公よ久しく近習を勤て不行跡れ者なきば外へ出し難く綱
 宗公隱居後之態と予が方よ匿まひ置しに近き頃逃亡せしが身は置所なき儘斯る大膽
 れ惡事仕出來し某を罪に落さんと巧し者あるん何よもせよ予が云譯立難けきば只今
 拷問しく一々白狀させん夫々と一味は役人共より付和助は肌を脱せ廣庭よ引伏箆に



以連て隠栖へ急ぎてこそは行ふべき

説話分頭茲に又越後國新瀧に繁昌の商家軒を並べ傾城屋互に家造を異にし隨處々々
又輪奐に結構を盡しけき遊客の貴賤の別なく晝夜を分ぬ三絃に最矯絶ける歌妓は
慶報間末社が騒ぎ唄賑ふうち繁昌は此新瀧に隠れ居る熊手屋は悉く熊手屋は悉く熊手屋は悉く
に火を燈すと云ある者畜者抱け娼妓を賣叱り小職の生統絶ぬ程叱り懲して使ひけり
七年以前持參金をもく此熊手屋に入夫とあり身代を日々仕上げ今は大奮財あると其
心底飽まで曲け家付に親類に危急を援はせ高利と食とく人け離儀を厭はせ入夫の身
あがら我儘に寡り家付の娘多金と恒嫌思因て言葉醜く追使をど多金之母は身逝し後
の惣四郎を賣け父に如く敬ひ且身代は善ありしも今父の世よりしくなりと優柔く
事く聊りも抗はず此七八日以前より信濃國に領主更科家け儲君都守之介殿越後遊歴
と披露きて密に此熊手屋に全盛滿洲が許る來と給ひ今日降雪に銀世界黄金を散して
沈連の鬼徒に隨ふ壯侍互ひに現を抜しゆ遊び動搖めく奥二階裏二階よと娘は多金

新造藝妓諸共に降積雪に光景をば詠笑て居しが思はずも見下す屏に其下に年れ齡の
十六七前髪立の色白く目鼻立を卑しうらせ二十四拜に笈絃懸け藁苞背負ひ破笠は
雪風を撥りて半の破を腰より下と雪を埋きて檜杓の首けみ顯のれ片手の雪を支て寒
死や凍ゆけん苦の聲音にて呻叫ぶ聲目も當ふれ多金は見るより目に持は涙二人
に向ひて言けるの吾々三人の好風景と六花と詠笑て樂光と屏に下ある彼は若衆と雪
も凍えて苦む体救ふて遣んと思へども親父が指揮に嚴酷さに救ふ便利もあはれもれか
ふと言る言語も新造が人の援へば援はるゝ報酬と有と聞たき何卒援ふて遣度もれ
多金様も斯くて耳語は多金の微笑も角も兎もと言語新造二階と下立傘忍び支
窮し裾を掲げて雪中庭を傳ふて屏際け用心口も手と掛く開んとすきど氷着明ぬお
不堪て力を入漸くと戸を明けも外れ方へ傘を差し顔差出し是順禮に御若衆様此大雪
も何時迄も其所を左して居時の凍えて今も死る故に此家は娘子多金様が御深切人
れ見ぬ間も妾と連立早く庭より來よかしと言る言葉も順禮の宛も嬉氣も首を擡げ聲

戦はして言けるを叱らさぬ閉り行ませうと思へど返寒に凍えよして足り立させ雪
 は漸次強くあまします私と今日此所で雪に凍えて死ぬと思へば悲しうござりました
 がね優い其の言葉左様ならばと身を起せど雪に凝縮し足さきば起んとして雪の中
 又も倒れて伏轉べば新造の手を伸し漸々と起して遣せど半身は雪に塗る衣類と凍り
 て氷柱垂り目も當るぬ風情あると伴へば齒根も合す震ひあから屏の内にぞ入に
 ける多金の密に彼順禮と薪部屋も忍せ置け握飯を與へ湯と遣て介抱するまど順禮は
 人心地付て漸々已さぬ復りける既其日も疾暮くも雪明り故未だ宵と思ふに早くも
 更移て三更に鐘と娼閑が宵よしも亦賑はし死折しも廊下は方邊に騒がしく樓主惣四
 郎が聲と均しく聲高々と罵詈あぐら娘多金に聲と擲み十六七は若衆の襟首と捕へて
 廊下よと曳摺ながら言を聞ば此娼輩が何處に乞食か知さぬ奴を引せり込て薪部屋で
 け相對ひ酒よ飯よと搬ぶよ一乳綜合ふく親れ面へ泥棒若衆め二十四拜も顔が強ひサ
 ア何處に奴だ其名を言へ但し泥棒は手引でも仕様と思ふは是若し者此奴先を樹へ

縛て置けと立騒げば若衆と聲震とし私は順禮も相違ござりません娘子様は慈悲に
 てとんふをも構せ惣四郎贅言吐せに黙て居るととた白眼を又多金を睨付て我が所
 爲と若衆は白狀已如何する見居ると踏た蹴たり娘とも止むる女郎も下命て勝
 手は方邊追遣て又彼若衆を男共に指圖して縛束げんとせし折こそあき更科殿の儲君
 都守之介敵娼は葛浦お案内させく入來り給ひ此体見よ進寄り樓主惣四郎を呼近付
 きば惣四郎の飛退り疊に首を摺付て敬ひ侍死奉る都守之介殿言辭と出し先刻よとれ
 一伍一々は残らぬ聞たり娘多金に實心が彼順禮は仇とあり愛目と見たるも可憐あ
 ど、言さしかがら次の方へ振向て手と打叩けば近習は侍御用さふと言さながら手を支
 と死何り耳語紛ひしが又侍は身を起し其座を立て暫くすると水引かけく上包大きく
 見たる其中の何れも黄金と知られけると惣四郎が前に置き其儘立く次は問へ下りけり
 都守之介は惣四郎に向ひ今宵此家を騒がせし順禮は憎けきと已れが遊興は邪魔とさ
 り面白うらま令宵一夜は順禮を物置小屋よ止く遣て明日は勉て追出せよ今降雪も互

て彼も死果おば不便に至り娘が仕出せま今宵は始末彼は順禮と娘をば扱ひぐくらの
 此金よて笑ひみせよとの言葉を開き怨四郎の詔笑脅肩恐入たる其れ言辭重たれ金に
 纏頭にて下命れ如く計ひませう性命冥加も順禮め貴郎が無ば愛目と見ん果報者めと
 白眼付け又都守之介れ方を向て娘が事までれ心添コソ萬浦御大切に殿様を致しませ
 う不今日れれ禮と和女より宜敷や上呉よ更やすきバ御寝あり遊しませ是若衆も元れ
 薪部屋を早く行て寐く仕舞と言きて若衆の怖々あぐり元れ所を悄悄と此場を立て行
 んけり怨四郎の命殿に懷裏計算手れ先で捨く見ゆ、笑ひ顔挨拶して不退死ぬ萬浦の
 燈火を手お把て都守之介れ前より立已が坐敷を誘ひ行さて此都守之介殿の世間聞え
 と憚りて紫大盡と喚做の外套を始め大小柄系小袖帯までも皆一様に紫に羅紗絨絨
 け裝飾もゑ斯の紳号を取らさし者にく其名遊里お鳴渡り紫大盡を知らぬもれあかり
 けと都守之介と小夜更て不圖目を覺し見給へば萬浦れ居ぬよ起上と誰ぞ参ると呼給
 へば返答をまつ、障子と開て來る者お能其女と見てあきバ萬浦にゆぐで此家れ娘